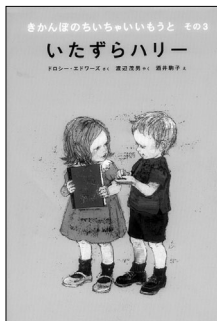


『きかんぼのちいちゃいもつと』
 ドロシー・エドワーズ著
 MY NAUGHTY LITTLE SISTER Vol.3
 (渡辺茂男訳・福音館書店 二〇〇五年十一月―二〇〇六年九月)



※ 草山たかえ

小さな子どもたちのためのお

話を読む。あるいは聴く。その体験に何があるのか、長いあいだ言い表す言葉が見つからなかった。自分が何を体験し、気持ちがいかなにも和らぐのか。くんなちゃんシリーズの訳者であ

る間崎ルリ子は、お話を体験する醍醐味を「自分ではない誰か他の人になる」⁽¹⁾ ことにあると言う。この心理的な体験は同化と呼ばれ、言葉によつてはじめて可能になる。言葉と共に生み出されたイメージは自分自身の創り出したものの、誰とも共有し得ないものであり、且つ自身の心と一体化しやすい性質を持つ。話を聴いている間、創り出されたイメージが心の中を動き回る。それによって自分と主人公との距離がぐつと近づく。主人公と一緒に笑ったり、泣いたり。そのような体験によつて、子どもに「人の悲しみをわが悲しみとする人

間性がつくられていく」⁽¹⁾ という。それは共感の土台となる心の動きである。なるほどと思う。話を聴きに集まっている子どもたちの光景が目につく。あれはみんなで一人の主人公のお話を共有しているわけではないのか。一人ひとりの心の中にその子独自の主人公のイメージが生まれ動いているのか。そう思うと何だか楽しい。お話を読むたびに新たに生まれたイメージが自由気ままに心の空間を飛び回る。そんな動きをイメージしながら今日は『きかんぼのちいちゃいもつと』を楽しんでみたい。

ドロシー・エドワーズ(Dorothy Edwards)は、イギリスでストーリーテラーの第一人者とされている。BBCで幼児向けお話番組「Listen with Mother」を担当していたこともある。『きかんぼのちいちゃいもつと』はBBCで放送されたものに本として出版され、今でも子どもたちに人気があるという。日本では一九七八年に旧版(渡辺茂男訳、堀内誠一挿絵)が出版され、二〇〇五年から約一年かけて改訂出版された。改訂版は渡辺茂男訳、酒井駒子の挿絵による全三巻で構成されている。きかんぼのいもうとに起こったさまざまな出来事が一まとまりずつ語られるので、どこから読んでも構わない。内容にはつながりがあり、前に語られていたエピソードが別のところでも語られ、読者にはそのつながりを発見する喜びもある。語り手はいもうとのお姉ちゃんである。「わたしがまだ小さくて、わたしのきかんぼのいもうとがもつと小さかったときのことでした」。ほとんどの話がこのように始まる。

※甲南大学大学院人文科学研究科博士後期課程在籍

第一巻は『ぐらぐらの歯』と題されている。ある時いもうとが、庭で木から落ちたりんごを食べていると、口の中がぐらぐらとするのを感じる。「きかんぼのちいちゃいもうとは、とてもびっくりして、もうすこしで石だんからころげ落ちそうになりました」。小さな歯が一本、口の中で揺れている。初めての体験に不安になったいもうとは、慌ててお母さんのところへ駆けていく。お母さんが子どもの歯は抜け替わるのと、今度は丈夫な大人の歯が生えてくることを説明してくれる。なあんだ、そうなのか。安心したいもうとはぐらぐらの歯を仲良しのパンやさんに見せ、ぎゅうにゆうやさんに見せ、まどふきやさんにも見せる。みんなが「へえ」と言ってくれるのが嬉しくて、今度はお母さんが歯医者さんへ行つて抜こうと誘っても「うん」と言わない。まどふきやさんがもう一度やってきて、みんながどんな時に歯医者さんに行くのか教えてくれる。行つてみたくなつたいもうとは「歯医者さんに行きたいの」とお母さんに言う。順番がやってきて、椅子に座つたいもうとは口を大きく開ける。「かわいい歯だね」と歯医者さんが言う。先生がほんとかわいい歯だけを集めていると聞きたいもうとは、考えた末、自分の歯もコレクションに加えてもらおうと、「はい、これあげる」と自分の手でその歯を抜き取ってしまう。最初、不可解に感じられていた身体の一部に生じた出来事は周囲からの声かけによって当たり前が出来事になる(歯は自然に生え変わるもの)。納得したいもうとの心から不可解さが消える。その歯がわたしの歯に、つまり私の一部になると、今度はたくさんの人たちに見せて

まわる。ぐらぐらの歯を持つていることは、自分が成長している印である。私の身体が成長している。そこには言葉では表現しきれない「満足(satisfaction)と喜び(joy)」⁽²⁾がある。いもうとの喜びは行為となつて周囲に共感を求める(ほら、見てみて)。みんなの笑顔が返ってくる。十分満足したいもうとは、まるで自分で創り出した大人への儀式のように、その歯を歯医者さんへのプレゼントに差し出す。

第二巻は『おとまり』である。ここでは『かわいそうなチャーリー・ココア』を紹介したい。いもうとは隣のジョーンズおくさんをココア・ジョーンズおくさんと呼ぶ。毎朝一時過ぎに両家の間の台所の壁をおくさんが叩くと、いもうとがココアをご馳走になりに行く習慣があつたからである。子どものいないココア・ジョーンズおくさんといもうとは大の仲良しで、お掃除好きのおくさんの手伝いもいもうとの大事な日課の一つである。歳を取り、かがむ度に背中を痛がるおくさんを見かねたジョーンズさんは、ある日上等の掃除機を購入する。おくさんは大喜び。ところがいもうとは「あたし、それ、きらい!」と近寄らない。どんなに掃除がしやすいかなるかを説明しても無駄である。「あたしが、お仕事すけてあげる!」と泣きながら家を飛び出してしまふ。子どもにとって不審なものは不審なのだ。納得がいかなければ受け入れられない。おくさんの相談を受けたジョーンズさんは、彼女にどう説明したらよいか思案する。数日後、庭でたんぽぽの綿毛を吹いて遊んでいるいもうとの傍に寄つてきたジョーンズさんは、「うちのチャーリー」の話をする。チャーリー

とは掃除機のことである。「かわいそうに、チャーリーは、とてもおなかをすかせているんだ」。いもうとの耳がびくりと動く。ごみを食べるチャーリーは、お掃除好きのおくさんの家ではいつもお腹一杯食べられないのだ。そんなことを聞いたら放っておけないのがきかんぼのいもうとである。彼のために急いでたんぼの綿毛を摘み取るとココアおくさん宅へ向かう。「こんにちは、チャーリー・ココア」。自分で挨拶をする。大事な仕事も上手にこなす（たんぼの綿毛を食べさせてやること）。彼女はもうチャーリーと友達だ。掃除機のスイッチを入れた時の大きな音も怖がらない。それはチャーリーがごみを食べている声なのだ。食いしん坊のいもうとはチャーリーをもっと喜ばせようと、ごみ集めにちりとりを持って庭へ飛び出していく。いもうとにとって、掃除のお手伝いは遊びを含んだ大切な仕事である。きれいな好きなおくさんの真似をしながら家を清潔にしていこう。それはただ遊んで周囲を散らかすこととは違った体験である。自分の働きによって実際に家は片付き、ココアおくさんも喜んでくれるのだ。そこには自分の「能動性（activity）と効力性（effectiveness）」（②）を十分に発揮することで、周囲に認められる体験がある。私にも何かができる。周りの人を喜ばせることだってできる。きかんぼのいもうとは、その体験様式の基礎を十分身につけていると言えそうだ。掃除機のチャーリーを受け入れ、彼を喜ばせる方法まで思いついたのだから。

第三巻は『いたずらハリー』である。ハリーはきかんぼのいもうとの更に上をいくいたずらっ子である。もちろん男の

子である。この巻は『パンの耳』が面白い。いもうとはバターつきパンの耳を嫌がる。真ん中のふわふわした部分を食べ終わると、残ったパンの耳でゲームをしたり、丸い形に変形しメガネの代わりをしたりする。いつもは穏やかなお母さんも黙ってはいない。お母さんにも子どもの頃、無理してパンの耳を食べてきた歴史があるのだ。「まい目は、そのままですよ。二まい目はジャムつき。あなたたち、運がよければ、そのつぎは、ケーキですよ！」お母さんの懸命な声かけも功を奏さない。ある時、ハリーのお母さんから意外なことを知らされる。ハリーの家に遊びに行った時には、いもうとはいつも残さず食べるというのだ。「え？」お母さんも語り手であるお姉ちゃんもびくりする。「どうしてかしら？」質問してみるのがいもうとは何も答えない。そうこうしているうちにお父さんが登場し、パンの耳を残すことを本気で怒ると、いもうとは小さな声で確かめる。「ハリーみたいに、パンの耳をのこさないのね？ いたずらハリーみたいに、パンの耳をのこさないのね？」その日以降、いもうとはパンの耳を残さなくなる。平穏な毎日が戻ってくる。ずいぶん時間が経ったある日、テーブルの小さな引き出しの割れ目からみどり色のこけのよななものが。中を開けるとカビだらけのパンの耳が沢山こぼれ落ちる。きかんぼのいもうとはある課題に直面している。たかがパンの耳、されどパンの耳である。お母さんの、そのまたお母さんの代からのやりとりが此処でもう一度展開しようとしている。言われた通りに家のルールを受け入れるか否か。しばしの熟考。いもうとはハリーの方法を取り入れる。

それは異質な方法を自分の家庭の中に取り入れることであり、大人の意に添わない、子どもなりの解決方法を実行にうつす挑戦でもある。ハリーがハリーの家で試みている方法を持ち込もうとして、いもうとは自宅のテーブルの小さな引き出しを利用する。それは同じ目的（パンの耳を食べない）を持った、ある行動の模倣というかたち（何処かに隠す）を取りながらも「私の解決法」という新しさを生み出している。いもうとのとんち勝ちにみんなが笑う。

ここまで臨床家フレッド・パイン（Fred Pine）が論文「自己体験の形成、拡張、傷つきやすさ」⁽²⁾の中で述べている自己体験についての理論に基づきながら、きかんぼのいもうとの生活体験を捉え直してきた。すると日常のささやかな出来事の中に、子どもが「自分」であることを意味づけていく体験が生じているのが分かる。パインは生後数ヶ月から二年目のあいだ、特にでたためな体験として生じる諸々の出来事を、幼児が次第に「自分の体験」として積み重ねていく時（結晶化していく時）、同時に自己意識の結晶化が起きていることを他の研究者の言葉を紹介しながら述べている。

自己意識、すなわち一つの“私”体験が結晶化する時、これらの特徴は自動的にその体験の性質を規定するものとなり、その結果、ある自己が、私の自己になるのです。この地点において、子どもには、体験を“自分のもの”として受け止め、世界を体験する中心として自己を感じる能力が生まれてきます。

より小さな時期から始まる自己の結晶化は、その後も日々の体験を自己体験、つまり「私の体験」として積み重ねる中で続いていくだろう。自分というまとまりの体験が自分自身であることへの理解と、周囲の人々もそれぞれのかけがえのなさを生きていることの理解へと、時間をかけてつながっていく。

ここで語り手としてのお姉ちゃんの役割について考えてみたい。お姉ちゃんという他者の語りによって、読者にはきかんぼのいもうとがなぜそのように考えたのか、次の行動を選んだのかが理解できる。いもうとの行動を、その都度きりとられた場面の中で眺めるだけでは見えてこない彼女の体験の流れが見えるのである。まなざしが、いつもいもうとを捉え続けていることに、私たち読者も「安らぎ（ease）と連続性（continuity）」⁽²⁾を感じる。それは人間の生が体験の連続性（不連続さの体験をも含めて）を心に刻みながら進んでいくという事実と、連続性の感覚とは自分だけで体験できるものではなく、他者のまなざしを通して徐々に身につけていくものであることを想起するからであろう。自分が今、一人の人間として存在している以上、無数の人たちのまなざしに包まれ、手助けを受けながら生きてきたという事実がある。子どもたちがお話の世界を体験することにより、生き生きと自身の中に取り入れているのは、そこに空気のように醸し出されているまなざしなのかもしれない。

きかんぼのいもうとがなぜ「きかんぼ」なのか。それは毎日の体験が心に収まりきらないからである。大人には当たり

前のことがいもうとには納得できない。もつと我を通したい、自分の決めたやり方で世界に挑戦してみたい。そんな彼女のものがきが周囲には「きかんぼ」に映る。ところが不思議なことに読者である私も、このいもうとにもう少しおりこうにしないさいと説教したくはならない。なぜだろう。それは「きかんぼ」があるがままであること、その人らしくあることの原因とつながっている部分だからではないだろうか。「きかんぼ」であることに粘りつつ、泣いたり諦めたりを繰り返しながら日々の生活を続けていく力が、大人になった時、周囲の人たちがその人らしくあることを支える力へと拡がっていくからではないだろうか。先に引用した間崎ルリ子は、今でも子どもたちへの読み聞かせの活動を続けている。著書の中で彼女は次のように述べている。

お話を語ろうとする人々は、感受性を豊かに保ち、鋭く目覚めさせ、この地球上のいろいろなところに住んで暮らす人々に対する親しみ、尊敬、深い愛情、共感などを抱けるようになること、また、さまざまな形の自然と芸術に対する五感を通じた感性と理解をはぐくむこと、それを達成するためにあらゆる努力をすることが大切だと気づきます。

子どものお話をゆつくりと読んでみる。声に出して読んでみる。するとそこにある伸びやかな空間を実感できる。誰かがしっかりと主人公であるその子を見つめよう、まなごそう

として意思がある。それは登場人物の誰かであったり、語りの連続性を保ち続ける作者であったりする。終わりまでのひととき、その力を共有してみる。読後には心の表面が柔らかくなり、心の奥は内側からしつかりしようとするのが分かる。子どものお話は心に優しく、精神を鍛えてくれる。

引用文献

- (1) 間崎ルリ子『ストーリーテリング―現代におけるおはなし―』（児童図書館叢書3）児童図書館研究会、一九八七年。
 - (2) Fred Pine, *Developmental Theory and Clinical Process*, 1985.
- 斉藤久美子・水田一郎監訳「自己体験の形成、拡張、傷つきやすさ」『臨床過程と発達① 精神分析的考え方・かわり方の実際』岩崎学術出版社、一九九三年。

（くさやまたかえ・臨床心理学）

